

# 洋櫃制作の背景には何があるのか

—大交易時代の東アジア・東南アジアの物流をモノから考える—

立教新座中学校・高等学校 荒井 雅子

## 1. 実施学年及び教科・領域

高校1年生 地歴公民科 世界史 B (必修)

※ただし、対象クラスは研究員が担当する2クラス(合計83名)であり、そのうち1クラスについて分析した。

## 2. 学習のねらいと博物館の活用との関連について

### (1) 単元名

世界の一体化の進展

(山川出版社『新世界史』第10章大交流・大交易の時代 第3節世界の一体化の進展)

### (2) ねらい

#### ①学習指導要領との関連

この実践では、高等学校世界史 Bにおける「(4) 諸地域世界の結合と変容」「アジア諸地域の繁栄と日本」を範囲とする。しかし、単にアジア地域の動向を追うだけでなく、大単元の目的である諸地域世界の統合をも視野に入れて、単元構成を行った。そのため、単元構成としては世界史 Aにおける「(2) 世界の一体化と日本」のうち、世界の一体化に対する日本の対応も把握させようとする「イ 結び付く世界と近世の日本」に近くなった。

#### ②単元の目標

- ・班の中で意見を交換し、興味を持って分析することができる。(関心・意欲・態度)
- ・既習事項を踏まえて分析の結果を的確に表現することができる。(思考・判断・表現)  
※歴史的思考力
- ・論文、画像、一次史料などの様々な形の資料から必要な情報を抜き出し、関係性に気付くことができる。(資料活用 of 技能) ※よみとく力 ※歴史的思考力
- ・16世紀に形成された世界的なネットワークについて、理解する。(知識・理解)

世界史 Bでは「歴史的な見方や考え方を深化させ、歴史的思考力を培う」ことを目標としており、そのため科目においては、各単元に「主題を設定して行う学習」が段階的に設定され、最終的に「探求」において「歴史的思考力を培い、言語活動の充実」を図るとされている。この実践では、歴史的な見方や考え方を深化させる手段の一つとして、様々な歴史資料に触れ、それをよみとく力を育成しようと考えた<sup>1</sup>。また、世

<sup>1</sup> この方向性は、学習指導要領の方針に沿ったものである。「(資料を多面的・多角的に考察し、よみとく技能を習得させる。)(『高等学校学習指導要領』p36)」よみとく力につ

界史において育成される歴史的思考力については、日本学術会議の提言にある「過去を多角的に理解する力」<sup>2</sup>を前提としたい。

### (3) 博物館との関連

#### ①活用方法

非来館型

#### ②活用資料

1) 歴博画像データベース：

H-1618-2「花樹鳥蒔絵螺鈿洋櫃（輸出漆器コレクション）」

2) 展示：第2展示室 大航海時代のなかの日本「花樹鳥蒔絵螺鈿洋櫃」展示解説

### (4) 指導観

『新世界史』においては、9章以前が地域世界を扱っているのに対して、10章は、近世の世界の一体化の動きを述べると共に、古代・中世と近世を繋いでいる。世界の一体化をもたらした交易品としての茶・砂糖・銀への言及があるが、それは主にヨーロッパとの関連で叙述され、アジアとの関係性が明確でない。そこで、南蛮漆器（洋櫃<sup>3</sup>）という交易品を紹介することで、世界の一体化のなかにアジアの視点も取り入れ、世界史と日本史の関係に焦点を当て、アジアにおける貿易が早くから世界経済を前提として成り立っていた事に気づかせつつ<sup>4</sup>、第11章（東アジア・東南アジア諸地域の動向）に繋げることにした。

高校1年生を対象とするため、生徒の世界地理・前提となる歴史的事項への理解は

---

いては、学術会議の提言を踏まえて「①文字資料、②図像資料、③工芸品や道具などのモノ、④過去の記憶をとどめる場、などについて…それら意味するところを分析する力」（日本学術会議「提言『歴史総合』に期待されるもの」（2016年5月16日）、p10）と理解することができる。この実践は③を①を援用することで多角的に理解しようとするもの。具体的なよみとく力のレベルについては後述。

<sup>2</sup> 提言によれば、歴史的思考力には「過去を理解する力と歴史記述を分析する力」があり、前者は「…過去から現在に至る変化を認識する力と過去を多角的に理解する力」の二つに分けることができるという。（日本学術会議、同書、p10）

<sup>3</sup> 洋櫃とは、安土桃山～江戸時代初期にかけて、南蛮人の注文から作られるようになった、輸出向けの漆器（南蛮漆器）のうち、日本にはない形状の櫃のことである。南蛮漆器はいわゆる鎖国が完成した後も継続的に輸出されていたが、今回は洋櫃の形に注目し「大航海時代」における東西（文化）交流の一つの形を「具体的」にしめす。またこの時代に更に利用された漆は、日本産だけでなく東南アジア産もあったとの研究成果（2013年度歴博展示「時代を作った技—中世の生産革命」）を踏まえて、原料の漆が記載されている多様な資料を紹介することで、事実関係を「多面的」に理解させる。このように、具体的なモノから、「大航海時代」の東西交流と東南アジア～東アジアの域内交流の姿を示し、日本の対応に気付かせたい。

<sup>4</sup> 次の学習指導要領の改訂によって高校の地理歴史科の履修内容・科目が大きく変わるため、新たな科目で求められる学習の姿が模索されている。特に歴史総合に於いては、日本史・世界史を統合するような科目編成が求められるため、必然的にグローバル・ヒストリーを前提にした歴史学習を視野に入れることになる。また、單元ごとの間に答える形での学習も提案されており、歴史学習の姿は大きく変わらざるを得ない。（日本学術会議「提言 再び高校歴史教育のあり方について」（2014年6月13日）及び日本学術会議、前掲書（2016年5月16日）による）

あまり深くない。地理的感覚の不足は授業の展開を工夫することで対応したい。日本史との関連が比較的深く、かつ、南蛮交易・大航海時代については既習事項も含まれている単元なので、中学校で学んだ基礎知識や既習事項を前提としつつ、授業を展開したい。

### 3. 指導計画（2時間扱い）

過程	時間	○学習活動及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
世界の一体化の進展（1）	1	<p>○スペインが新大陸に進出したことで、ヨーロッパ経済の中心が大西洋沿岸地域に移行し、大西洋を中心とした貿易ネットワークが形成されたことを理解する。</p> <p>○新大陸の植民地で生産された商品は、大西洋や太平洋を越えて世界と結びついていたことに気がつく。</p>	<p>□大西洋の三角貿易の姿を明らかにし、欧州に持ち込まれた銀が中国に流出したことに言及する。</p> <p>□プランテーション産品等が、どこに輸出されたのかに注目させる。</p> <p>□大西洋と太平洋が、銀の交易を通して繋がったことに注目させる。</p> <p>■16世紀に形成された世界的なネットワークについて、理解したか。</p> <p style="text-align: right;">&lt;ワークシート、知&gt;</p>
世界の一体化の進展（2）	1	<p>○16世紀末～17世紀の日本において輸出を主眼とする漆器生産が行われていた事を理解する。</p> <p>○様々な資料を利用して、南蛮漆器が輸出用であると理解できる特徴を調査する。</p> <p>○「南蛮漆器が世界の一体化を前提にした商品と言えるのは何故か」について考察する。</p>	<p>□南蛮漆器の原料や制作目的と、世界の一体化というキーワードを関係させる。</p> <p>■既習事項を踏まえて、分析の結果を的確に表現することができたか。</p> <p style="text-align: right;">&lt;ワークシート、思&gt;</p> <p>■論文、画像、一次史料などの様々な形の資料から必要な情報を抜き出し、関係性に気付くことができたか。</p> <p style="text-align: right;">&lt;ワークシート、技&gt;</p> <p>■班の中で意見を交換し、興味を持って分析することができたか。</p> <p style="text-align: right;">&lt;観察、関&gt;</p>
振返り	0.2	○ワークシートの返却、活動の振り返り	□南蛮漆器の特徴を示し、世界の一体化を前提とした国際商品が生産されていたことを確認する。

#### 4. 実践の概要

(1) 日時 2016年度 2学期 10月18日

(2) 単元 第Ⅲ部 近世 第10章 東アジア・東南アジア諸地域の動向  
第3節 世界の一体化の進展(2) (『新世界史』山川出版社)

(3) 展開

過程	時間	○学習活動及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
導入	5分	○1571年以降世界が「一体化」したことの確認	□電子黒板等で情報共有。 □質問を記載したワークシート配布。
展開	展開1 7分	○資料0の提示と問0の取り組み。 「特徴、用途、作り方、などを想像して5つのキーワードを書きなさい。」	□本時の問を共有。「南蛮漆器が世界の一体化を前提にした商品といえるのは何故か」
	展開2 7分	○資料1の読解と問1の取り組み。 「この時代に、このような商品が生まれた理由を考えよう。」	□現代の研究者が自分の経験を書いた文章であることを伝える。 ■資料1から、輸出を目的とした商品生産が行われていたことを理解したか。 <ワークシート、技> ■班の中で意見を交換することができたか。 <観察、関>
	展開3 7分	○資料2の読解と問2の取り組み。 「この壺に付着していた漆は、どこで採取された物だと考えられますか。」	□電子黒板等で情報共有。 □註も含めて、資料をよく読むことを伝える。 ■資料2から、輸入漆を多用していたという事実を理解したか。 <ワークシート、技> ■班の中で意見を交換し、興味を持って分析することができたか。 <観察、関>
	展開4 7分	○資料3の読解と問3の取り組み。 「資料3から「漆」を探そう。どこから(どこへ)輸出されたものか、読み取れることを書こう。」	□当時の記録であるため、読みにくい事を伝えておく。 ■歴史的記録である史料(資料3)と研究記録である資料2を併せて、輸入漆について、多角的に理解できたか。 <ワークシート、技> ■班の中で意見を交換し、興味を持って分析することができたか。 <観察、関>

	展開 5 7分	○資料4の読解と問4の取り組み。 「資料3、4を読んで、日本で利用されていた漆の一部は、どこから、どのようにしてもたらされたか、考えよう。」	□複数の資料を使い、根拠を示して説明することを伝える。 ■既習事項を踏まえて分析の結果を的確に表現することができたか。 <ワークシート、思> ■班の中で意見を交換し、興味を持って分析することができたか。 <観察、関>
まとめ	10分	○問5、問6の取り組み。 「この時代に、このような商品が生まれた理由を考えよう。」 「今日の授業で分かったことを自分の言葉でまとめよう。」	□南蛮漆器の写真提示。 □生産の過程でもアジア域内交易を前提としていたことを補足する。 ■既習事項を踏まえて、分析の結果を的確に表現することができたか。 <ワークシート、思> ■班の中で意見を交換し、興味を持って分析することができたか。 <観察、関>

#### (4) 評価

##### ①評価基準

歴史的思考力やよみとく力の深まりを測定するために、PISAの非連続テキストの読解に関する指標を参考にした。PISAによれば、読解の第一の段階は「情報の取り出し」で、統計資料や画像など（非連続型テキストという）に書かれている情報を正確に取り出すことであるという。第二段階は「解釈」で、書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり、推論したりすることである。第三段階は、「熟考・評価」で、テキストに書かれていることを知識や考え方、経験と結び付けることであり、第一から第三の段階まで、よみとく力はより深まってゆくと考えられている<sup>5</sup>。歴史的思考力についても、小川は「事件・事実」「解釈」「歴史批評」という、PISAと類似した段階を示しており<sup>6</sup>、このことから、よみとく力の深まりは、歴史的思考力の深まりにも対応すると考えられる。

##### ②評価

この実践における評価項目について、振り返りたい。第一に、生徒の「関心・意欲・態度」については、おおむね意欲的に取り組んだと考えられる。班活動であるために、いわゆるフリーライダーも見受けられたが、一人で考えるだけでは到達できない視点にも到達できる可能性を考えると、班別の学習効果はあると考える。

次に、「思考・判断・表現」の評価であるが、ワークシートの問1・問5（添付資料1

<sup>5</sup>読解力向上に関する指導資料—PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向—

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/007.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/007.htm) (2017年1月28日アクセス)

<sup>6</sup>小川幸司『世界史との対話 <上> 70時間の歴史批評』(地歴社、2011)

参照)を対比させると、歴史的思考力の深まりを推し量ることができ、1/4程度の生徒が、思考を深化させたと考えることができた。それは、生徒の解答を以下のように対比することで見えてくる。

- ・(生徒 A) 問 1 : 文具などの整理に便利だから、漆塗りがヨーロッパで人気になったから。→問 5 : 日本の蒔絵を気に入ったヨーロッパ人がたくさん漆器を買い求めるようになり、それで大きな利益を得るため安い漆を輸入しヨーロッパに売るため。
- ・(生徒 B) 問 1 : 世界の一体化によって日本の文化と外国人の好みがつながったから。→問 5 : 日本の文化、ヨーロッパ人好み、カンボジアなどの東南アジアの物など、様々な国の要(素)が世界の一体化によって繋がっているから。
- ・(生徒 C) 問 1 : 輸出入の貿易の時代に、自分の国で好まれるものではなく外国でも好まれるものをつくらないと外国で売れないから。→問 5 : ヨーロッパで世界の一体化が推し進められる中、アジアの商品などは珍しいものとして構入する人が多かったのだろう。日本では漆器がとてもよく好まれたが、日本は小さい上に島国漆はそう多くなかったので、外国から大量に輸入することで漆不足を解消した。
- ・(生徒 D) 問 1 : 外国人が日本の蒔絵を気に入ったので、注文し作らせたから。→問 5 海外産の漆の方が日本産よりも安いため、外国人がよく使うこのような物を作ることで輸出でのもうけを出そうとしたから。

生徒 C も D も、問 1 の段階で前時の既習事項である「世界の一体化」と南蛮漆器を結びつけて考えており、欧州と日本の直接的な繋がりを想像して、答えを導き出した。その後、問 5 の段階では、授業の知識を加えながら、世界の一体化の様子について、より詳細に描き出そうとしていた。生徒 A と生徒 D は、資料 2 の「安価な漆」という記述に注目し、それを利用するとどうなるのか、について想像して「輸出で利益を出そうとした」と答えている。また生徒 C は資料 5 の輸入量に注目して、「漆不足を解消した」と予測を立てている。どの答えも、複数の記述や既習事項を結び付け、自らの思考を深めている、つまり過去を多角的に理解していることが類推される既述である。

一方で、資料を読んでも思考が深まらなかったと考えられる生徒も 1/4 程度いた。それは以下の記述に代表される。

- ・(生徒 E) 問 1 : 文具や資料を整理するため、日本の文化に魅了された→問 5 : ヨーロッパ人が蒔絵を気に入り、筆筒に蒔絵を施したものを日本人に作るよう要求したから
- ・(生徒 F) 問 1 : 文具などの整理をするため、日本から輸入された漆塗りが、外国から人気が出たから→問 5 : 日本の技術に魅了された外国人が日本から輸入して有名になったから
- ・(生徒 G) 問 1 : 日本との交流があったから→問 5 : 国際交流が盛んに行われたから
- ・(生徒 H) 問 1 : 16 世紀～17 世紀に世界が一体化し外国人が日本の文化を取り入れることが可能になったから→問 5 : 日本の文化が海外に流出したから

授業の最後で問われた問5の答えに、授業中に示された新たな情報が加わったり、情報を利用して思考を深めた傾向がみられないため、どの生徒も、問1と問5の答えが類似している。残念ながら、世界の一体化における日本の積極的な対応の姿を理解してもらうことができなかった。

「資料活用の技能」については、問2～問4の答えから、資料からどの程度正確に事実関係を抜き出すことができたか、という、第一段階「情報の取り出し」の能力について評価することができた。

問2では、「タイ産の壺」「東南アジアで採取される漆系塗料、チチオール成分の検出」「本試料とビルマ産漆塗料成分の類似」という事実から、東南アジア・ビルマ・タイという考えられ得る正解に到達したのは、有効回答39人中37名であった。問3は、列記されている3カ国と日本の輸出入の関係を読解するものであるが、有効回答39人中、正確に「カンボジアから日本へ（輸出された）」と答えたのは31名であった。誤答は8名で、いずれも貿易相手国を日本と読解できていなかった<sup>7</sup>。3カ国の貿易相手国は記述から理解するしかないため、読解力に差が生じたと考えられる。また、班活動にしたために、話し合いの結果誤答に導かれた生徒が一定数いたと考えられる。問4は有効回答数38名のうち、正解が37名、誤答が1名であった。正解のうち、理由を明記して答えられた生徒は18名、理由を明記せずに答えた生徒が19名いた<sup>8</sup>。班活動のおかげなのか、いずれも、情報の取り出しについては十分な段階にあると考える。むしろ、抽出した情報を利用して、どのように理解を深めるかに授業の重点を置く必要があったようだ。

#### 関連資料

#### H-1618-2「花樹鳥蒔絵螺鈿洋櫃」



(輸出漆器コレクション)



教室の様子

<sup>7</sup> 「カンボジアからタイ」が3名、「カンボジアから中国」が4名「中国からカンボジア」が1名いた

<sup>8</sup> この問については、設問が不十分であったため、理由を明記して答えると理解しなかった生徒が一定数いたと考えられ、情報抽出の精度で考えれば18+19を正答数と理解するのがよいと考えた。

## 5. 成果と課題

### (1) 成果

- ・歴史総合を視野に入れて、この実践では、16世紀以降の世界の一体化を多角的・具体的な資料に即して理解することという大きな目的を立てた。生徒のワークシートからは、授業で学習した事項だけでなく、歴史資料から様々な情報を読み取り、それらを総合して記述の根拠としたことがわかる。
- ・探求の形の歴史学習を視野に入れるなら、博物館の収蔵品をその素材として利用する可能性は高まるだろう。教材として吟味された素材よりも、研究の途上に有り様々な解釈の可能性があるほうが、探求の素材としては利用の可能性が高いと考える。今回は世界史と日本史をより強く結びつける資料として南蛮漆器を利用したが、グローバル・ヒストリーの素材としては好適な歴史資料であった。
- ・資料からどの程度の情報を引き出すのかについても、様々な指標を利用して、評価が可能である。今回の実践では、「世界の一体化に対応し、原料や技術の一部を輸入し、日本で加工し、製品として輸出していた」という認識（世界の一体化に対する日本の対応）を共有することが到達点だったが、班別活動を取り入れたことで、生徒同士で同様の認識を共有できたようだ。数は少なかったが誤概念については、次の授業の導入で振り返りを行い、認識を共有した。
- ・歴史的思考力の深まりは、解釈、歴史批評にまで及ぶ。「南蛮漆器成立の背景にはこの時代の世界の一体化という要素があった」と積極的に答えられた生徒は、学習事項をこの時代を理解する概念と結びつけることが出来たと理解できる。更に、「現代の日本で工業製品について同じ様子が見て取れる」と答えた生徒も複数おり、現代に通じる発展的思考まで到達した、と考えることができる。

### (2) 課題

- ・モノを見て、そこから情報を抜き出すというよみとく力は、様々な情報を抽出してしまいうために、授業の中でその情報を整理しながら利用することが難しい。読解をある一定の方向に導くことで、この問題は回避できるが、純粋な意味での読解にはつながらないのではないか、という危惧がある。
- ・同じ資料を利用しても生徒の理解度には差があることから、ある程度同じレベルのよみとく力を担保する必要がある、今回の実践では班別活動を取り入れて、その差を極力少なくしようと試みた。個人の活動にする際にも、情報を共有するなどして、差を埋める工夫が必要だろう。



## 6. 書誌情報他

### (1) 歴史民俗博物館館蔵資料と web

- ・ H-1618-2 「花樹鳥蒔絵螺鈿洋櫃（輸出漆器コレクション）」
- ・ 歴博画像データベース ([http://www.rekihaku.ac.jp/gallery/db\\_detail.html](http://www.rekihaku.ac.jp/gallery/db_detail.html))  
「これまでの企画展－中世の生産革命」  
(<http://www.rekihaku.ac.jp/exhibitions/project/old/130702/index.html>)

### (2) 参考文献

- ・ 青山薫「世界史と桃山漆器」(荒川正明編『日本美術全集 10 黄金とわび』小学館, 2013, pp210-214)
- ・ 北野信彦・小檜山一良・竜子正彦・高妻洋成・宮腰哲雄「桃山文化期における輸入漆塗料の流通と使用に関する調査」(国立文化財機構東京文化財研究所『保存科学』(47), 37-52, 2007) (<http://www.tobunken.go.jp/~ccr/pdf/47/4705.pdf>) (2016年10月21日アクセス)
- ・ 北野信彦・小檜山一良・木下保明・竜子正彦・本多貴之・宮腰哲雄「桃山文化期における輸入漆塗料の流通と使用に関する調査(2)」(国立文化財機構東京文化財研究所『保存科学』(48), 133-145, 2008) (<http://www.tobunken.go.jp/~ccr/pdf/48/4813.pdf>) (2016年11月5日アクセス)
- ・ デニス・フリン, 秋田茂・西村雄志編『グローバル化と銀』(山川出版社, 2010)
- ・ 日本学術会議 史学委員会 高校歴史教育に関する分科会「提言 再び高校歴史教育のあり方について」(2014)  
(<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t193-4.pdf>) (2017年2月1日アクセス)
- ・ 日本学術会議 史学委員会 高校歴史教育に関する分科会「提言『歴史総合』に期待されるもの」(2016) (<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t228-2.pdf>) (2017年2月1日アクセス)
- ・ 羽田正編, 小島毅監修『東アジア海域に漕ぎ出す1 海から見た歴史』(東京大学出版会, 2013)
- ・ ボダルト=ベイリー B. M. 「17世紀の長い旅: ドイツと日本の比較」(『大妻比較文化』vol. 11, pp25-34, 2010)
- ・ 文部科学省『高等学校 学習指導要領』
- ・ 「244 朱印船貿易と日本町(17世紀)「異国渡海船路積」寛永14年(1637)8月1日」(歴史学研究会編『世界史史料4 東アジア・内陸アジア・東南アジアⅡ』(岩波書店, 2010))
- ・ 歴史民俗博物館図録『時代を作った技－中世の生産革命』(歴史民俗博物館, 2013)

## 添付資料 1 ワークシート

第10章 大交流・大交易の時代  
第2節 東方航路の開拓と大西洋世界の出現  
第3節 世界の一体化の進展

A 世界の一体化の進展 (2)

1年 組 番 氏名

問0 これは、なんだ？ 特徴、用途、作り方、などを想像して5つのキーワードを書きなさい。

資料1 16世紀末～17世紀初めには輸出用の漆器生産が行われていた。

問1 予測：この時代に、このような商品が生まれた理由を考えよう。

資料2 京都市の工務所から、タイ産の壺に付着した漆が発掘された。この漆は日本の漆か？

問2 この壺に付着していた漆は、どこで採取された物だと考えられますか。

資料3 漆は、どこから来たのか？ 1637年の記録から「漆」を探そう。

問3 資料3から「漆」を探そう。どこから（どこへ）輸出されたものか、読み取れることを書こう。

資料4 漆はどうやって来たのか？

問4 資料3、4を眺んで、日本で利用されていた漆の一派は、どこから、どのようにしてもたらされたか、考えよう。結論を書くときには、そう判断した根拠も含めて書こう（根拠となる場所に、赤線を引くなどして示しなさい）

問5 結論：この時代に、このような商品が生まれた理由を考えよう。

問6 今日の授業で分かったことを自分の言葉でまとめよう。

資料を段階的に読解するための手引きにした。それぞれの資料から読み解いてほしい項目を並べ、ワークシートにした。資料は問に対応する形で配布し、スライドにして、黒板にも掲示した。

## 添付資料 2 配布資料例

資料3<sup>1</sup>

**高砂** [高砂] …五百里…南の方たいわんと申す湊ニ日本人商売ニ来候、おらんた住宅仕り、大明に近く御座候ニ付、糸、巻物の類、ここに買い申し候、おらんた居申候付、天竺、南蛮物も御座候、鶏頭籠の地ニ有物、鹿皮までにて候…

**まんえいら** [マニラ] …九百七拾里…此所南蛮人城居申候、大明人も商売のため城下に居申候、他国の代物、巻物、糸、南蛮羅紗、猩々皮はあの類 (ニ) 御座候、地ニある物は鹿の皮、せうりうきう<sup>2</sup> [小琉球] と蘇木 [蘇芳]、白砂糖、水牛の角、葡萄酒、金のなわめゆひ [縄目結い]、カネの類、珊瑚珠も来り候へ共、是ハ地ニハこれ無く候、奥南蛮物にて御座候…

一、**柬埔寨** …千四百八十里、此所より買いたり候物、鹿の皮、蠟蜜、黒砂糖、水牛の角、さいかく [犀角]、漆、さうけ [象牙]、檳榔子、大楓子、胡椒、柄鮫、孔雀の尾、りんしや [輪紗]、うこん

一、日本より持ち渡り候物、銅、鉄、いおう [硫黄]、樟脳、所帯の道具、扇子、からかさ、やかん

<sup>1</sup> 「244 朱印船貿易と日本町 (17世紀) 『異国渡海船路撰』寛永14年(1637)8月1日」歴史学研究会編『世界史史料4 東アジア・内陸アジア・東南アジアII』岩波書店

<sup>2</sup> 呂宋壺(るもんづば)を指すと考えられる。中国やベトナムで保存用に用いられた壺だが、ルソン島を經由して日本に入ったのでこの名がある。日本では茶器として珍重された。

資料を4種類配布した。順番に読解すると、17世紀頃の日本には、東南アジアから大量に漆が輸入されていたという事実が浮かび上がる。

資料1：南蛮漆器が欧州で受容されていたことを示す文章→南蛮漆器への需用があったことを示す、また、漆器の輸出先をも暗示する。形状の理由が類推される。(ポダルト=ペイリーB. M., 2010)

資料2：京都の漆工房跡から発掘された漆壺の付着成分を分析した資料→資料3、4の裏付けとして利用可能。(北野他, 2007)

資料3：日本がどこことどのようなものを取引していたかを示す史料。→南蛮貿易の広がりや商品の幅を示す。(「244 朱印船貿易と日本町 (17世紀) 『世界史史料4』」)

資料4：オランダ商館に入ってきた漆の記録。→どこから、何トンという記録があるので、資料2、3の客観的裏付けに利用が可能。(北野他, 2007)